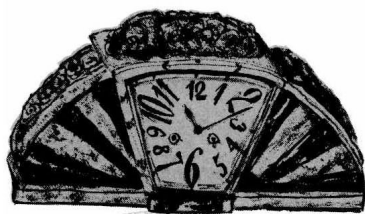


徳山道助の帰郷

柏原 兵三



新潮社



徳山道助の帰郷

昭和四十三年一月二十五日 発行
昭和四十三年二月五日 二刷

五五〇円

著 者 柏 原 兵 三

発行者 佐 藤 亮 一

発行所 株式会社 新潮 社

東京都新宿区矢来町七一
電話東京(261)一一一(大代)
振替 東京 八〇八番

(乱丁、落丁のものは本社又はお買求めの書店にてお取替えいたします。)

印刷・株式会社 金羊社

製本・大進堂製本所

© 1968 Hyozo Kashiwabara Printed in Japan

目次

徳山道助の帰郷	5
殉愛	107
クラクフまで	165
朗読会	199
ピクニック	217
あとがき	254

カバ！扉画

著
者

徳山道助の帰郷

— 母とやわぐ

徳山道助の帰郷

第一章

徳山道助^{どくさんどうすけ}の故郷の家は、大山と呼ばれる標高千米近い山の麓にあった。大分市からローカル線で三駅目にあたるM駅で降りて、川沿いの県道を小一時間も歩くと、その麓に出る。県道からは、徳山道助の生家の庭の東の隅に植わっている三本の大きな銀杏の木と、白壁の土蔵だけが見えた。銀杏の木は道助が中学校に入学した時に母が記念に植えてくれたものであったが、いつしか見上げるような大樹となっていた。土蔵はこのあたりのどの農家にもあるので、別に彼の生家が富んでいることを意味しない。冠婚葬祭にあたって集まる親類縁者を泊めるための寝具、什器などをしまうための土蔵にすぎない。

彼の家は、先祖代々が切り拓き殖やして行った山あいの狭隘な田畑を耕作し、そのかたわら養蚕を営んで来た貧しい自作農であった。ただこの土蔵の白壁は、昔からこのあたりの景観に独特の風趣を添えていた。土蔵を白壁に塗っている家はこの辺では彼の家だけだったし、そしてまた手入れがよく行き届いていてその壁がいつも白く塗りかえられていたからである。ぬき出るように白い壁は、誰の目にもしみ入るようで清潔な印象を与える。

彼が予備役に編入されたのは支那事變の勃發直後であつたが、その時まで村人たちはこのあたりにさしかかると、この銀杏の木と白壁の土蔵を仰ぎ見ては、この家から徳山道助さんが出たのだ、と思つたものだった。そしてこの小さな山村にいずれ陸軍大將が生れることを固く信じて疑わなかつた。村の小学校の生徒たちは、この銀杏の木と白壁の土蔵を見ると、学校で先生たちから聞かされた彼の逸話の数々を思い出した。それは二宮金次郎を髣髴とさせる、勤勉無比の優等生だった彼の小学校の尋常科、高等科時代にまつわる逸話だった。徳山道助は神童の誉れ高く、高等科の時は一年から三年に飛び越えてしまった程よくできた。中学校に入ってから月謝免除の特待生だった。家の手伝いを人一倍してそうだったのだ。そうしたことを色々と小学校の生徒たちは、学校だけでなく家でも聞かされていたのである。中学生は、といっても村からは毎年僅か一人か二人の中学生が誕生するに過ぎなかつたが、この銀杏の木と白壁を見上げ、自分たちもこの郷土の輝かしい先輩のあとに続けぬものでもないと思つたりした。しかし徳山道助は村人たちが期待したように陸軍大將にはならなかつた。彼は陸軍中將で終つてしまつたのだ。しかしそれでも、この村で陸軍の将官になつたのは、彼が最初で最後だったのである。

長男の彼の代りに家を嗣いだ、すぐ下の弟の啓吉から、来たる五月十日は亡き母の三十三回忌にあたるからぜひ御帰郷ありたい、その法要には、兄上が帰郷されれば、武助も帰郷するといつて来ていることゆえ、兄弟姉妹全員が久しぶりに揃うことになる、姉の鶴も高齢ゆえ、恐らくこれが兄弟姉妹が相集える最後の機会になると思われる、一夕をみんなで語らい合つたら、母の霊もきっと慰められるであろう、という趣旨の手紙が、早くも正月の末に道

助のもとに届いていた。

その手紙を追い駆けるように、姉の鶴からも、妹の咲からも、弟の利八からも、彼の久かたぶりの帰郷を切に勧める手紙が来た。

末弟の武助からも、巻紙に筆でしたためられた改まった手紙が来た。自分も会社の方が目下大変忙しいが、法要のある十日の朝着くように帰郷するつもりでいる、この際兄上もぜひ帰郷の御決意あらんことを、という趣旨を候文でしたためた手紙であった。

敗戦の年の三月、熊本幼年学校に入学する孫養子の治を伴って先祖のお墓参りに帰郷して以来、昭和三十年になる今まで、およそ十年間、徳山道助は帰郷していなかった。

徳山道助は日露戦争に、乃木將軍麾下の砲兵少尉として参加した。彼は乃木將軍を敬愛していたから、このことを誇りとしており、年をとってから、酒が入ると、孫たちにせがまれて、彼の初陣であったこの日露戦争のことを話したが、彼が最後に師団長として戦った支那事変のことは、決して語ろうとしなかった。彼にとってその戦争が余程苦しくて厭な戦いであつたためであらう。

彼は連隊長の使いで乃木將軍の許へ赴き、報告を手渡したことがある。その時見た乃木將軍は何十日も髭を剃っていない、憔悴し切った顔をしていたが、支那事変で徳山道助の率いる徳山兵団が苦戦に陥り、部下の死傷がほとんど涯しなく続いた時、彼はよくこの乃木將軍の不精髭だらけの、苦悩に満ちた、沈鬱な顔を想い泛べたものだった。彼自身何十日も髭を剃らずに不眠の夜を続けていたのであった。ただそんな時彼に無念に思われたことは、自分が耐えがたい苦悩を味わわされている戦争が、日露戦争ではなくて、時とともに彼自身その

意義を懷疑するようになっていた支那事変であるということであつた。そして日露戦争とその背景をなした明治時代に限りない郷愁を覚えることがあつたのである。

軍人としての最初の戦いが日露戦争であり、最後の戦いが支那事変だつたということが、この明治生れの「老兵」の軍歴の特徴であるが、今その軍歴を日露戦争から支那事変まで順を追つて辿つてみることにする。

*
*
*

徳山道助が陸軍士官学校を卒業したのは明治三十六年である。同年六月二十六日付で砲兵少尉に任じられ、野戦砲兵第十七連隊に配属された。しかし翌三十七年二月十日にはロシアへの宣戦布告があり、日露戦争が起つた。同年五月十四日には、彼の連隊にも出動命令が下り、同年七月十八日には、広島の子品港を出帆している。

遼東半島の青泥窪に上陸したのは七月の二十四日であつたが、その間僅か一週間足らずのうちに、船に積んだ挽馬の半分は疫病のために斃れてしまつてゐる。幸いだったのは、兵が全員無事でいてくれたことだつた。

まだ若い徳山少尉は、船の中で、よく眠れなかつた。そして何度も起き出しては兵隊が寝冷えをしないように、毛布をかけ直してまわつたりした。

また大砲がちゃんと固定されているかどうかを、何度も起きて確かめに行ったものだつた。大砲がひとりでに動き出してどこかにぶつかり射つ前に故障でもおこしたら、またそれこそ兵に怪我でもさせたら、この両方をお預かりしている者として、天子様に申訳ないと思つたのである。将校たる者は、慈父の如く兵にまみえなければならぬ、と彼は絶えず心に思

った。とはいっても、兵たちはみな彼よりも年上であつた。しかし眠りかけている部下たちを見ていると、彼らが我が子の如く思われて来るから不思議であつた。一方彼の心は初陣の手柄を立てることに對する期待の念に満ち、五尺二寸に満たない短軀には勇氣が凜々とみなぎっていた……。

彼は大砲に近寄るたびに冷たい砲身をそつと手で撫でた。可愛いといふ大砲よ、お前が俺の小隊に赫々たる武勲の誉れをもたらすのだ。何百何千万の露助を打ち殺し、帝国に勝利をもたらしてくれなければならぬ。たのんだぞ、大砲！

青泥窪に船が着くと、徳山少尉は大砲の陸揚作業の総監督を命ぜられた。すべすべして捉えどころのない大砲を綱で縛つて、起重機にかけるのは中々どうして容易なものではない。うまく縛つたつもりでも、途中でずりりと滑り脱けないとも限らない。しかも時間に限られているのだ。

最後の大砲の陸揚げの時である。兵が愚図々々しているのを見かねて道助がいった。

「もうよろしい。荷揚げ始め！」

連日の睡眠不足で道助は気が高ぶっていたのかも知れない。それに時間が予定を超えそうなのでいらいらしていたのかも知れない。ちょっと危ないかな、と思つたにも拘わらず、そう断を下してしまつたのである。部下の一人が彼のところへ駆け寄つて来て、まだ危ないから、もう少し待つて頂きたい、万全を期したいから、といった時も、道助は大見得を切つた。まことに若氣の至りであつた。

「心配するな、俺に任せておけ」

起重機が動き出した。道助は船から降りた。大砲は甲板から空中に吊し上げになつた。起

重機の頭が向きを変えて行くにつれて、少しずつ空中を動く、そして海の上に来た時だった。綱が少しずれ、水平に宙吊りになっていた大砲が傾き始めたのである。

「ああ」と徳山道助は心の中で叫んだ。大砲が落ちる。大砲が海の中に落ちる。その瞬間寝不足でばやけていた頭が嘘のように澄みわたった。俺の運命、徳山道助の運命もこれで終りだ。金鵒勲章も終りだ。切腹して陛下にお詫びしなくてはならぬ。母は俺の不運を知ってどんなに嘆き悲しむであらうか……

「小隊長殿、大丈夫であります」とかたわらの兵が大きな声で叫んだ。目を凝らすと大砲は今にもずり落ちんばかりの恰好でいながら、しかしそれでも無事岸壁に近づいて来るではないか。大砲が地面に着いた時、道助は大砲のもとに駆け寄り、砲身をかき抱き、海中に落ちないでくれたことを感謝した。

旅順攻撃戦において彼は小池中隊に属し、砲四門、兵十六名を指揮する小隊長として、二〇三高地攻撃の歩兵を掩護した。この時、宇品港出帆以来行動を共にして来た、中央幼年学校以来の同期生、高津弥吉少尉は頭を撃たれて戦死した。徳山道助自身も、壕に生き埋めとなり九死に一生を得た。

高津弥吉は松山の大地主の次男であったが、出征する少し前に長兄をチフスで失い、戦争が終ったら軍隊を辞め、郷里の家を嗣ぐことになっていた。人のいい男で、ついでに兄貴の細君ももらうことになっているが、器量よしで気立てのいい女だから、兄貴のお古ではあるが、我慢するのじゃ、といていた。自分が死ぬと家を嗣ぐ者は誰もいなくなる、だから自分はどうしても帰らなければならない、と口癖のようにいつていた。戦闘中でも、砲弾の音がするたびに、「こいつをやられると子孫絶滅じゃ」といつて皮の軍嚢を鞆丸に半ば本気で

あてがったりする憎めない男だった。腕の一本位なくなってもいいが、子孫を絶やすことになったら一大事だというのである。この高津弥吉は旅順攻撃戦に参加して三日のちには戦死してしまった。

徳山道助が生き埋めになったのは、高津少尉戦死の三日後であった。

その日、ロシア軍は日本軍が担送中の負傷兵を明らかにそれと知りながら攻撃し、これを殺傷するという事件を惹き起した。そして日本軍はこれに報復することを決定し、旅順港内のロシア軍赤十字病院の砲撃を、徳山少尉の属する小池中隊に命じたのである。道助はこれを拙劣な報復、武士道に反する報復と信じ、強硬な反対意見を具申した。しかし少尉の意見は容れられるところとならなかった。仕方なしに徳山少尉は砲撃命令を小隊に下し、自身は砲撃の様子を双眼鏡で窺った。砲弾は続けて命中し、蜂の巣をつついたようにロシアの看護婦が逃げ出すのが見えた。徳山少尉は砲撃中止を命じた。ともかく報復の意図は達せられた、と考えたからである。ところがほかの小隊は一向に砲撃を止めない。そのうちに怒ったロシア軍が猛烈な反撃に出た。二〇三高地の重砲をもって集中砲火を浴びせたのである。徳山道助は兵たちと共に壕の中に隠れた。兵たちは念仏を唱えていた。天罰が下った、という者もいた。一発至近弾が落ち、二発目は反対側に落ちた。「今度はあたるぞ！」と徳山道助が叫んだ時、三発目が命中し、壕は崩壊した。彼は生き埋めになったが、苦心して土を掻き分けてやっと這い出し、自分と共に這い出した兵に命じて助けに来ようとし隣隣の壕の兵を呼びにやり、二〇三高地の方を幾度も振り返りつつ、埋まった兵を救い出した。この時二名の死者、数名の重傷者を出し、徳山道助自身両手に軽傷を負った。この痕は死ぬまで左右両手首に茶色いしみとなって残った。

旅順包囲戦も終りに近づいた時、第三軍の司令部からよく見える丘の攻撃に歩兵が向つた。ところがその丘に構築されたトーチカの機銃が妨害して近寄れない。ごく間近に味方の歩兵がいるこの目標物の砲撃には、連隊一の名射手徳山中尉が適任であろう、ということになった。徳山道助は全軍固唾を嚥むうちに、数発目にこれを爆砕した。「これは乃木將軍も双眼鏡で見ていたということだ」と後年徳山道助はこの手柄話を誇らしげに語ったものである。

この頃彼は中尉に昇進した。

旅順が開城すると、徳山中尉は入城式に参加することなく、直ちに奉天戦に向つた。ミシチェンコの騎兵集団に遭遇したのはこの時である。猛将ミシチェンコの率いるこの騎兵集団はロシア軍中の精鋭であつたが、その時は北方へ退却中であつた。このミシチェンコの騎兵集団に邂逅する前夜、徳山道助の属する連隊は凍てついた高粱畑に露営したが、天幕一つなく、塹壕を掘るにも土が凍つていて掘ることができない有様であつた。兵隊たちは将校の制止も聞かないで、高粱きびを焚いて煖をとつた。こうして敵との接触の様子も不明のまま、日の出るのを待っていたのである。

やがて空が白んで日が昇る頃兵隊の一人が前方に林が見える、と叫んだ。

徳山道助は双眼鏡を構えてこれを見ていたが、やがて、「小池中隊長殿、林が動き出ししましたぞ」と報告した。それがミシチェンコの騎兵集団であつた。

小池中隊は直ちに放列を敷いた。この時、徳山中尉は中隊の中でもっともよく働いた。両隣の小隊長は戦死し、徳山中尉は、中隊の砲の大部分を指揮して、二百米から五百米の至近距離を移動するミシチェンコ軍を射って射ちまくつたのだ。